

## 2次元任意物体を過ぎるおそれの流れ

東大 生研 成瀬 文雄

## §1. 序

円柱への字像関数が既知である2次元物体を考え、このよ  
うな物体のまわりのおそれの流れを、つきの(i)～(iv)のはかりに  
つけて研究し、物体に働く力の式を導く。たゞし(i),(ii),(iv)のは  
かり、基礎方程式は Navier-Stokes 方程式またはこれに類する  
方程式で、2次元の定常運動を考え、(iii)のはかりは基礎方程  
式に Stokes 方程式をとり、2次元の定常運動に限らぬ。

## (i) 一様流中にあかれたとき

非圧縮の Navier-Stokes 方程式を基礎方程式として、さりと  
ぞき法 (the method of matched asymptotic expansion) でとく。

展開のパラメータを  $\varepsilon$  ( $\varepsilon$  の order は  $1/\log Re$ ,  $Re$  は Reynolds  
数) とするととき、 $O(\varepsilon^3)$  まで正しく結果を導く。

## (ii) 壁効果

1枚の無限平板でしきられた空間の中で、または2枚の平

行無限平板の間の真中の位置で、物体が任意の方向に動くときにはありと、Stokes 方程式を基礎方程式として調べる。物体の大きさを示す特性的長さを  $l$ 、壁から物体までの距離を  $d$  とし、 $l/d \ll 1$  を仮定、 $O(l/d)$  または  $O(l^2/d^2)$  を省略して物体に働く力の式を導く。

### (iii) 成層流体中の運動

密度が鉛直下方にわずか線型的に増加していくような流体中を物体が斜めの方向に動くときを調べる。成層流体に対する基礎方程式を Boussinesq 近似とし、 $Re \ll 1$ 、 $R_i \ll 1/R_e$  ( $R_i$ : Richardson 数) のばかりをきりつなく法でとき、物体に働く力として  $O(\varepsilon^2)$  まで正しく式を導く。

### (iv) 電磁流体中の運動

一様な磁場下で電気伝導性流体中を物体が磁場に斜めの方向に動くときの流れの様子を調べる。 $R_m$  を磁気レイノルズ数、 $M$  を Hartmann 数とするとき、 $Re \ll 1$ 、 $R_m \ll 1$ 、 $M \ll 1$  であるが  $R_m/R_e$ 、 $M/R_e$  は任意の値をとり得るとして、きりつなく法で解析し、 $O(\varepsilon^2)$  まで正しく式を導く。

## § 2 一様流中にあがれたとき

物体が無限空間中を一定の速度で運動するとき、または一様流中に固定されたときを考える。物体に固定した座標系をとり、無次元化された位置座標、速度、圧力を

$$\bar{F} = U^* / \ell, \quad \bar{q} = q^* / U, \quad \bar{p} = \ell P^* / \mu U \quad (2.1)$$

とする。ただし  $\ell$  は特性的な長さ、  $U$  は物体の速度、  $\mu$  は粘性率である。このとき Navier-Stokes 方程式と境界条件は

$$\Delta \bar{q} - \nabla \bar{p} = Re \bar{q} \cdot \nabla \bar{q}, \quad \nabla \cdot \bar{q} = 0 \quad (2.2)$$

$$\bar{r} = f(\theta) : \bar{q}_t = 0 \quad (2.3)$$

$$\bar{r} \rightarrow \infty : \bar{q} \rightarrow \bar{l}, \quad \bar{p} \rightarrow \bar{P}_{\infty} \quad (2.4)$$

である。ここで  $\bar{r} = f(\theta)$  は物体の形を表す、  $\bar{l}$  は一様流の方向を表す。また  $Re = P U \ell / \mu$  である。

### (i) きりつなき法による展開

S. kaplun etc.<sup>1), 2)</sup> が円柱のまわりの流れをヒントをきと同じように、全領域を  $\bar{r} \sim O(1)$  で表される内部領域と  $\bar{r} \sim O(1/R_e)$  で表される外部領域とに分け、内部変数  $IR(x, Y, Z)$  および外部変数  $IR(x, y, z)$  を

$$IR = \bar{F}, \quad IR = Re \bar{F} \quad (2.5)$$

のようにとる。また  $X, Y, Z$  および  $x, y, z$  は直角座標系で、流れの面は  $X, Y$  - または  $x, y$  - 面にとり、  $X$  の方向または  $x$  の方向を  $\bar{l}$  の方向と一致させてある。つきに外部および内部展開を、  $\varepsilon$  (order は  $1/\log Re$ ) でつきのようないく展開する。

### 外部展開：

$$\begin{aligned} \bar{q} &= \bar{l} + \varepsilon q_1(IR) + \varepsilon^2 q_2(IR) + \cdots + \varepsilon^n q_n(IR) + \cdots \\ \bar{p} &= \bar{P}_{\infty} + Re (\varepsilon p_1(IR) + \varepsilon^2 p_2(IR) + \cdots + \varepsilon^n p_n(IR) + \cdots) \end{aligned} \quad \left. \right\} (2.6)$$

内部展開：

$$\begin{aligned}\bar{\psi} &= \varepsilon Q_1(R) + \varepsilon^2 Q_2(R) + \dots + \varepsilon^n Q_n(R) + \dots \\ \bar{P} - \bar{P}_\infty &= \varepsilon P_1(R) + \varepsilon^2 P_2(R) + \dots + \varepsilon^n P_n(R) + \dots\end{aligned}\quad \left.\right\} \quad (2.7)$$

(ii) 内部展開

内部展開 (2.7) は (2.2), (2.3) に代入する。

$$\Delta Q_n - \nabla P_n = 0, \quad \nabla \cdot Q_n = 0 \quad (2.8)$$

$$R = f(\theta) : Q_n = 0 \quad (2.9)$$

が得られる。 (2.8) は Stokes 方程式であるから、 (2.9) をみたす解は、  $R \gg 1$  のときの漸近形を  $\theta \rightarrow \pi$  。

$$\begin{aligned}Q_n &= A_n \left[ \left( -\log \frac{R}{a_n} + b_n \right) \hat{e}_n + \frac{X_n R}{R^2} + c_n \hat{f}_n \right] + O\left(\frac{1}{R}\right) \\ P_n &= 2A_n X_n / R^2 + O\left(\frac{1}{R^2}\right)\end{aligned}\quad \left.\right\} \quad (2.10)$$

ここで  $\hat{e}_n, \hat{f}_n$  は直交する単位ベクトル、  $\hat{e}_n$  の方向および  $A_n$  は外部解との matching によって定められる  $\theta$  、  $c_n$  は未定、  $X_n, Y_n$  は直角座標を表し、  $X_n$  の方向は  $\hat{e}_n$  の方向にとされ  $\theta$  である。また  $a_n, b_n, c_n$  は  $\theta$  のよじれで決定される (Appendix 参照)。  $Z (= x + iY)$  - 平面上の物体が - 平面上の半径  $a$  の円柱へ、写像関数

$$Z = z + z_0 + h(z) \quad (z \gg 1; h(z) \sim o(1)) \quad (2.11)$$

は  $\theta \rightarrow \pi$  の写像である。

$$\begin{aligned}a_n &= a, \quad b_n = -\frac{1}{2} \{ 1 + \operatorname{coth}(\beta + 2\alpha_n) \}, \quad c_n = \frac{i}{2} \sin(\beta + 2\alpha_n), \\ re^{i\beta} &= \frac{1}{2\pi a} \int_{-\pi}^{\pi} \frac{\bar{h}(ae^{-i\theta}) - ae^{-i\theta} h'(ae^{i\theta})}{e^{i\theta} (1 + h'(ae^{i\theta}))} d\theta\end{aligned}\quad \left.\right\} \quad (2.12)$$

$\tau$  決定され、 $x_n$  は  $\bar{q}_n$  と X 軸とのなす角  $\tau$  である。

外部解と内部解の matching を行なう共通領域では、 $Q_n, P_n$  は

$$\left. \begin{aligned} Q_n &= A_n \left[ (\log \alpha R_e - \log r + b_n) \bar{q}_n + \frac{x_n \pi r}{r^2} + c_n \dot{\phi}_n \right] + O(R_e \frac{1}{r}) \\ P_n &= 2A_n \frac{x_n}{r^2} R_e + O(R_e^2 \frac{1}{r^2}) \end{aligned} \right\} \quad (2.13)$$

の形をとる。すなはち  $x_n = R_e \bar{q}_n$  である。

いま  $Q_1$  と外部解の第 0 近似との matching を行なう

$$\varepsilon = -1/\log \alpha R_e, \quad A_1 = -1, \quad R_e = \ell \quad (2.14)$$

が得られる。

### (iii) 外部解

外部展開 (2.6) と (2.2), (2.4) は代入すれば

$$\Delta \bar{q}_n - \nabla p_n - \frac{\partial \bar{q}_n}{\partial x} = q_1 \nabla \bar{q}_{n-1} + q_2 \nabla \bar{q}_{n-2} + \cdots + q_{n-1} \nabla q_1, \quad \nabla \cdot \bar{q}_n = 0 \quad (2.15)$$

$$r \rightarrow \infty : \bar{q}_n \rightarrow 0, \quad p_n \rightarrow 0 \quad (2.16)$$

が得られる。すなはち  $\bar{q}_n = 0$  となる。すなはち  $\bar{q}_n$  の  $r \rightarrow 0$  の  $\tau$

の境界条件は (2.13), (2.14) を用いて、内部解との matching を行なう

$$r \rightarrow 0 : \bar{q}_n \rightarrow -A_n \left( (\log r) \bar{q}_n - \frac{x_n \pi r}{r^2} \right) \quad (2.17)$$

が得られる。いま  $A_n, \bar{q}_n$  が既知であるとして、 $\tau$  の  $\theta < \ell$ ,

すなはち ( $\theta$  は  $\ell$  に直角を単位ベクトル) の方向に分ける。

$$A_n \bar{q}_n = - (H_n \ell + I_n \dot{\phi}) \quad (2.18)$$

このとき

$$A_n x_n = - (H_n x + I_n \dot{y})$$

$\tau$  の値から、(2.17) は

$$r \rightarrow 0 : \bar{q}_n \rightarrow H_n \left( (\log r) \ell - \frac{x_n \pi r}{r^2} \right) + I_n \left( (\log r) \dot{\phi} - \frac{y_n \pi r}{r^2} \right) \quad (2.19)$$

とす。 (2.15), (2.16), (2.19) を取扱; ためには  $\Psi_n, P_n$  を  $r \rightarrow \infty$  の如く 2つに 分割する と都合がよい。

$$\Psi_n = \Psi_{n1} + \Psi_{n2}, \quad P_n = P_{n1} + P_{n2}$$

(a)

$$\Delta \Psi_{n1} - \nabla P_{n1} - \frac{\partial \Psi_{n1}}{\partial x} = 0, \quad \nabla \cdot \Psi_{n1} = 0 \quad (2.20)$$

$$r \rightarrow \infty: \quad \Psi_{n1} \rightarrow 0, \quad P_{n1} \rightarrow 0 \quad (2.21)$$

$$r \rightarrow 0: \quad \Psi_{n1} \rightarrow H_n \left( (\log r) \alpha - \frac{xir}{r^2} \right) + I_n \left( (\log r) \beta - \frac{yir}{r^2} \right) \quad (2.22)$$

(b)

$$\begin{aligned} \Delta \Psi_{n2} - \nabla P_{n2} - \frac{\partial \Psi_{n2}}{\partial x} &= \Psi_1 \nabla \Psi_{n-1} + \Psi_2 \nabla \Psi_{n-2} + \cdots + \Psi_{n-1} \nabla \Psi_1 \\ \nabla \cdot \Psi_{n2} &= 0 \end{aligned} \quad \left. \right\} (2.23)$$

$$r \rightarrow \infty: \quad \Psi_{n2} \rightarrow 0, \quad P_{n2} \rightarrow 0 \quad (2.24)$$

$$r \rightarrow 0: \quad \Psi_{n2} \rightarrow 0 + o(1) \quad (2.25)$$

$\Psi_n$  は Oseen の程式の 2つの基本解  $\Psi'_0, P'_0$  や  $\Psi''_0, P''_0$  の

$$\Psi_{n1} = H_n \Psi'_0 + I_n \Psi''_0, \quad P_{n1} = H_n P'_0 + I_n P''_0 \quad (2.26)$$

のように 決定される。 さて

$$\Psi'_0 = 2 \left[ \nabla \left\{ \log r + e^{\frac{x}{2}} K_0 \left( \frac{r}{2} \right) \right\} - e^{\frac{x}{2}} K_0 \left( \frac{r}{2} \right) \hat{e} \right], \quad P'_0 = -\frac{2x}{r^2} \quad (2.27)$$

より

$$\Psi''_0 = 2 \nabla \times \left[ \left\{ \log r + e^{\frac{x}{2}} K_0 \left( \frac{r}{2} \right) \right\} \hat{e} \right], \quad P''_0 = -\frac{2y}{r^2} \quad (2.28)$$

であり、また  $K_n$  は  $n$  次の 第2種の 变形 ベッセル関数である、即

は 2 方向の 単位ベクトルである。 $(2.26) \sim (2.28)$  より

$$r \rightarrow 0: \quad \Psi_{n1} \rightarrow H_n \left[ (\log r + d) \alpha - \frac{xir}{r^2} \right] + I_n \left[ (\log r + d + 1) \beta - \frac{yir}{r^2} \right] \quad (2.29)$$

ここで  $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき  $d = r - \log 4$ ,  $r$  は才 1 の定数である。

したがって,  $\mathcal{B}_n$  は (2.25), (2.29) 通り,  $r \rightarrow 0$  のとき  $\mathcal{B}_n$  の形を  $t \rightarrow r \rightarrow 0$ :

$$\mathcal{B}_n \rightarrow H_n \left[ (\log r + d) \mathcal{R} - \frac{xr}{r^2} \right] + I_n \left[ (\log r + d + 1) \mathcal{J} - \frac{yr}{r^2} \right] + \alpha_n \quad (2.30)$$

ここで  $\alpha_n$  は  $\mathcal{B}_n$  の  $\mathcal{B}_{n-1}$  の係数である。  $\mathcal{B}_1, \dots, \mathcal{B}_{n-1}$  が既知であると

この  $\mathcal{B}_n$  は  $\mathcal{B}_{n-1}$  は Green 関数を使って  $\mathcal{B}_n$  の形には表示できる。

$$\begin{aligned} \mathcal{B}_{n-1} &= \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} T(x-z, y-\eta) f_n(z, \eta) dz d\eta \\ f_n &= \mathcal{B}_1 \cdot \nabla \mathcal{B}_{n-1} + \mathcal{B}_2 \cdot \nabla \mathcal{B}_{n-2} + \dots + \mathcal{B}_{n-1} \cdot \nabla \mathcal{B}_1 \\ T(x, y) &= \begin{pmatrix} -4 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial y} & -\frac{\partial}{\partial x} \end{pmatrix} (4 + \phi), \quad \psi = \frac{1}{2\pi} e^{\frac{x}{2}} K_0(\frac{r}{2}), \quad \phi = \frac{\log r}{2\pi} \end{aligned} \quad (2.31)$$

ここで  $f_1 = 0$  のとき  $\alpha_1 = 0$ , また  $f_2 = \mathcal{B}_1 \cdot \nabla \mathcal{B}_1 = \mathcal{B}_1' \cdot \nabla \mathcal{B}_1'$  であるから,  $\alpha_2$  の計算は比較的簡単である。 $\alpha_2$  は S. Kaplan<sup>1)</sup>によって円柱のまわりの流れを調べたときに計算されていて、

$$\begin{aligned} \alpha_2 &= e_2 \cdot \mathcal{R} \\ e_2 &= - \int_0^\infty K_0(z) K_1(z) \left[ z^{-1} I_1(2z) - 4 K_1(z) I_1(z) + 1 \right] dz = -0.87 \end{aligned} \quad (2.32)$$

である。ただし  $I_n(z)$  は  $n$  次の第 1 種の変形ベッセル関数である。 $\alpha_3, \alpha_4, \dots$  についてはまだ計算されていないと思われる。

#### (iv) 物体に働く力

共通領域で有効な (2.13) やよび (2.30) を用いて  $O(\varepsilon^n)$  の定

数の matching を行なう。

$$A_{n+1} \dot{I}_{n+1} = A_n (b_n \dot{I}_n + c_n \dot{f}_n) - (H_n d + e_n) \dot{I} - \{ I_n (d+1) + f_n \} \dot{f} \quad (2.33)$$

が得られる。すなはち  $A_n = c_n \dot{I} + f_n \dot{f}$  となる。したがって  $(2.12)$ ,

$(2.18)$  を用いて

$$b_n = b_1 + \frac{2H_n I_n c_1 - (2b_1 + 1) I_n^2}{H_n^2 + I_n^2}, \quad c_n = \frac{c_1 (H_n^2 - I_n^2) - (2b_1 + 1) H_n I_n}{H_n^2 + I_n^2} \quad (2.34)$$

が得られる。また

$$A_n \dot{f}_n = I_n \dot{I} - H_n \dot{f} \quad (2.35)$$

$(2.18), (2.34), (2.35)$  を  $(2.33)$  に代入して

$$A_{n+1} \dot{I}_{n+1} = -[(b_1 + d) H_n + c_1 I_n + e_n] \dot{I} - [c_1 H_n + (d - b_1) I_n + f_n] \dot{f} \quad (2.36)$$

となる。

$$H_{n+1} = (b_1 + d) H_n + c_1 I_n + e_n, \quad I_{n+1} = c_1 H_n + (d - b_1) I_n + f_n \quad (2.37)$$

が成立する。これが式。

いま  $Q_n, P_n$  から生ずる物体に働く力  $\bar{F}_n$  は

$$\bar{F}_n = -4\pi\mu U A_n \dot{I}_n$$

であるから、物体に働く力  $\bar{F}$  は

$$\bar{F} = 4\pi\mu U \sum_{n=1}^{\infty} (H_n \dot{I} + I_n \dot{f}) \varepsilon^n \quad (2.38)$$

が得られる。すなはち漸化式  $(2.37)$  を用いて、 $\sum_{n=1}^{\infty} H_n \varepsilon^n$ ,

$\sum_{n=1}^{\infty} I_n \varepsilon^n$  を成分とするベクトルは

$$\begin{pmatrix} \sum H_n \varepsilon^n \\ \sum I_n \varepsilon^n \end{pmatrix} = \varepsilon \left[ I - \varepsilon T \right]^{-1} \left[ \begin{pmatrix} H_1 \\ I_1 \end{pmatrix} + \sum_{m=1}^{\infty} \varepsilon^{m-1} \begin{pmatrix} e_m \\ f_m \end{pmatrix} \right] \quad (2.39)$$

の形にかけよ。これは

$$I = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad T = \begin{pmatrix} b_1 + d & c_1 \\ c_1 & -b_1 + d \end{pmatrix}$$

であり、 $[ ]^{-1}$  は逆マトリックスを表す。したがって  
(2.14) を用いて

$$\bar{F} = \frac{4\pi\mu U \varepsilon}{1 - 2d\varepsilon - (b_1^2 + c_1^2 - d^2)\varepsilon^2} \left[ \{1 + \varepsilon(b_1 - d)\}\bar{e} + c_1\varepsilon\bar{f} + N \right] \quad (2.40)$$

$$N = \sum_{n=1}^{\infty} \varepsilon^n \left[ \left[ \{1 + \varepsilon(b_1 - d)\} e_n + c_1 \varepsilon f_n \right] \bar{e} + \left[ c_1 \varepsilon e_n + \{1 - \varepsilon(b_1 + d)\} f_n \right] \bar{f} \right] \quad (2.41)$$

が得られる。 $\alpha_1 = 0$ ,  $\alpha_2 = e_2 \bar{e}$  を (2.41) に代入し, かつ  $O(\varepsilon^4)$

以上を省略すれば、

$$N = \varepsilon^2 \left[ \{1 + \varepsilon(b_1 - d)\} e_2 \bar{e} + c_1 \varepsilon e_2 \bar{f} \right] \text{ or } N = \varepsilon^2 e_2 \bar{e} \quad (2.42)$$

とあるから、これを (2.40) に代入して、 $O(\varepsilon^3)$  まで正確な力の式を求めることができる。ただし  $e_2$  は (2.32) によつて求められる。

また基礎方程式が Navier-Stokes 方程式でなく Oseen 方程式であるところには、(2.40) で  $N = 0$  とあれば、 $O(R_e)$  まで正しく解が得られていくことになる。

### (例題 1) 円柱(半径 $a^*$ )

字像関数  $Z = 3$  であるから、 $h(3) = 0$  となり、(2.12) より

$$a = a^*/l, \quad b_1 = -\frac{1}{2}, \quad c_1 = 0 \quad (2.43)$$

が得られる。(2.43) を (2.40), (2.42) に代入して得られた結果は、S. kaplun<sup>1)</sup> の結果と一致する。

(例題 2) 橢円柱 (長軸  $2a^*$ , 短軸  $2b^*$ )

一様流の方向と長軸のなす角を  $\alpha$  とする。定像関数

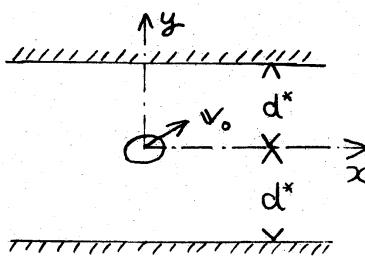
$$Z = 3 + \frac{k^2}{3} \quad \text{であるから, } f_1(z) = \frac{k^2}{3} z \text{ となり, (2.12) より}$$

$$a = (a^* + b^*)/2\ell, \quad b_1 = -\frac{1}{2}(1 + \sigma^2 \cos 2\alpha), \quad c_1 = \frac{1}{2}\sigma^2 \sin 2\alpha \quad (2.44)$$

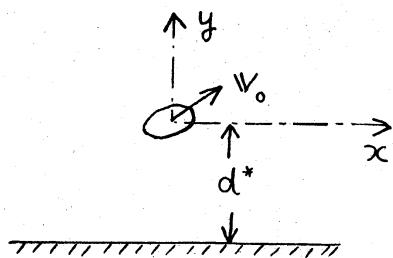
が得られる。たゞ  $\sigma^2 = (a^* - b^*)/(a^* + b^*)$  である。(2.44) を  
(2.40), (2.42) に代入して椭円柱に対する結果が得られる。とくに  $N = 0$  のときには、Oseen 方程式を基礎として導出された今井教授<sup>3)</sup>の結果と一致する。

### § 3. 壁効果

壁として一枚の無限平板または二枚の平行無限平板を有する。いま 2 次元物体が第 1 図 Case I, Case II に示すよう定位して速度  $V$  をもつているとする。基礎方程式は Stokes 方程式であるから、物体が非定常運動をしていても、定常運動として取扱つてよい。



Case I



Case II

第 1 図

いま物体の速度  $V_0 = W \vec{r}_0 + U \vec{r}_0$  で表わす。ここで  $\vec{r}_0$  は

方向の単位ベクトル、 $\hat{e}_z$  は  $x, y$ -面内にある単位ベクトルとする。つきに無次元化された速度  $\bar{w}$ ,  $\bar{q}$  ( $x, y$  面内のベクトル) を次式で定義する。

$$\bar{q}^* = W \bar{w} \hat{e}_z + U \bar{q} \quad (3.1)$$

(3.1) を Stokes の方程式に代入し、 $\frac{\partial}{\partial z} = 0$  を考慮すると、流体の運動は、 $x, y$ -平面内の運動と  $z$  方向の運動に分離できること。

(i)  $x, y$ -平面内の流れ

$$\Delta \bar{q} - \nabla \bar{p} = 0, \quad \nabla \cdot \bar{q} = 0 \quad (3.2)$$

$$\text{物体上: } \bar{q} = \hat{e}_z, \quad \text{壁: } \bar{q} = 0 \quad (3.3)$$

(ii)  $z$  方向の流れ

$$\Delta \bar{w} = 0 \quad (3.4)$$

$$\text{物体上: } \bar{w} = 1, \quad \text{壁: } \bar{w} = 0 \quad (3.5)$$

ここで  $\Delta, \nabla$  は、 $x, y$ -平面内の operator で、 $\bar{w}, \bar{q}, \bar{p}$  は  $x, y$  の関数である。

いかにもありて  $l/d^* = 1/d \ll 1$  とし、 $1/d$  は  $z$  の展開の解を求めることする。

(i)  $x, y$ -平面内の流れ

(A) 壁効果 (第 1 図 Case I)

フーリエ変換を用いてく。まず Stokes 方程式をみたし、かく物体上  $\bar{q} = 0$  をみたす解を  $\bar{q}_0, \bar{p}_0$  とするとき、 $\bar{q}_0$  は

$r \gg 1$  のとき (2.10) と同じ漸近形を  $t \gg$ .

$$\left. \begin{aligned} q_0 &\sim A \left[ (-\log \frac{r}{a} + b_1) \hat{u}_1 + \frac{x_1 r}{r^2} + c_1 \hat{y} \right] + O(\frac{1}{r^\nu}) \\ p_0 &\sim 2A \frac{x_1}{r^2} + O(\frac{1}{r^{\nu+1}}) \end{aligned} \right\} \quad (3.6)$$

ここで  $A$  と  $\hat{u}_1$ ,  $\hat{y}$  まだ未定である。いま  $\epsilon_x, \epsilon_y$  を  $x, y$  方向の単位ベクトルとし、 $\hat{u}_1 = l \epsilon_x + m \epsilon_y$  とかく。 $\nu$  は対称物体では  $\nu = 2$  となり、他の物体では  $\nu = 1$  となる。

$q_0$  の (3.6) で示された部分の  $x, y$  成分を  $u_0, v_0$  とするとき、

$u_0, v_0$  はフーリエ変換を用いて  $\omega$  のままで表示される。<sup>4)</sup>

$$u_0 = A \left[ \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ l \left( \frac{1}{|\alpha|} - |y| \right) - i m \frac{\alpha}{|\alpha|} y \right\} e^{i \alpha x - i |\alpha| |y|} d\alpha - l k_1 - m c_1 \right] \quad (3.7)$$

$$v_0 = A \left[ \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ m \left( \frac{1}{|\alpha|} + |y| \right) - i l \frac{\alpha}{|\alpha|} y \right\} e^{i \alpha x - i |\alpha| |y|} d\alpha - m(k_1 + 1) + l c_1 \right]$$

ここで  $k_1 = c - \log a - b_1 - 1$ 、また  $c$  は  $\omega$  のフーリエ変換のときでてくる定数である。

$$\log r = - \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{|\alpha|} e^{i \alpha x - i |\alpha| y} d\alpha + c \quad (3.8)$$

$\omega$  に壁の上で  $\bar{q}_0 = 0$  の条件を満足するための付加関数として、(i) (3.7) のままで積分形で表示され、(ii)  $f_1(\alpha), \dots, f_p(\alpha)$  の8つの  $\alpha$  の任意関数を含み、(iii) Stokes 方程式を満たす関数をもつてくる。この付加関数を  $g_i(u_i, v_i)$  とするとき、

$$u_i = l u'_i + m u''_i, \quad v_i = l v'_i + m v''_i \quad (i=1, 2) \quad ]$$

$$\left. \begin{aligned}
 u'_1 &= A \left[ \int_{-\infty}^{\infty} \frac{i}{2} \left\{ |k| f_1 + \left( \frac{1}{|k|} + 3|k| - y - 2k^2 y \right) f_2 \right\} e^{ikx - ik|k|y} dk + \frac{k_1}{2} \right] \\
 u'_2 &= u'_1 (y \rightarrow -y, f_1 \rightarrow f_3, f_2 \rightarrow f_4) \\
 U'_1 &= A \left[ \int_{-\infty}^{\infty} \frac{i}{2} \left\{ k f_1 - \left( \frac{\alpha}{|k|} y - \alpha + 2\alpha|k|y \right) f_2 \right\} e^{ikx - ik|k|y} dk - \frac{c_1}{2} \right] \\
 U'_2 &= -U'_1 (y \rightarrow -y, f_1 \rightarrow f_3, f_2 \rightarrow f_4, c_1 \rightarrow -c_1) \\
 u''_1 &= A \left[ \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{2i} \left\{ \alpha f_5 + \left( \frac{\alpha}{|k|} y + \alpha + 2\alpha|k|y \right) f_6 \right\} e^{ikx - ik|k|y} dk + \frac{c_1}{2} \right] \\
 u''_2 &= u''_1 (y \rightarrow -y, f_5 \rightarrow f_7, f_6 \rightarrow f_8) \\
 U''_1 &= A \left[ \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{2} \left\{ -|k| f_5 - \left( \frac{1}{|k|} + 3|k| + y + 2k^2 y \right) f_6 \right\} e^{ikx - ik|k|y} dk + \frac{k_1+1}{2} \right] \\
 U''_2 &= -U''_1 (y \rightarrow -y, f_5 \rightarrow f_7, f_6 \rightarrow f_8, k_1+1 \rightarrow -k_1-1)
 \end{aligned} \right\} \quad (3.9)$$

左の式を用いて、右の式

$$Q = q_0 + q_1 + q_2 \quad (3.10)$$

左速度と右速度の上での速度0の条件から、 $f_1 \sim f_8$  を決定する。 $O(1/d^4)$  を省略すると、この条件は

$$y = \pm d : \sum_{i=0}^2 u_i = 0, \quad \sum_{i=0}^2 U_i = 0 \quad (3.11)$$

左の式を用いて、(3.11) 式の  $f_1, \dots, f_8$  に対する式を代入する。

$$\left. \begin{aligned}
 f_1(\alpha) &= f_3(\alpha), \quad f_2(\alpha) = f_4(\alpha), \quad f_5(\alpha) = -f_7(\alpha), \quad f_6(\alpha) = -f_8(\alpha) \\
 f_1(\alpha) &= \frac{e^{-2\beta} - 1 + 2\beta + 4\beta^2 + 2d^2}{(1+2\alpha^2)(e^{-2\beta} - e^{2\beta} + 4\beta)}, \quad f_2(\alpha) = \frac{-e^{-2\beta} + 1 - 2\beta}{(1+2\alpha^2)(e^{-2\beta} - e^{2\beta} + 4\beta)} \\
 f_5(\alpha) &= \frac{e^{-2\beta} - 1 - 2\beta + 4\beta^2 + 2d^2}{(1+2\alpha^2)(e^{-2\beta} - e^{2\beta} - 4\beta)}, \quad f_6(\alpha) = \frac{-e^{-2\beta} + 1 + 2\beta}{(1+2\alpha^2)(e^{-2\beta} - e^{2\beta} - 4\beta)}
 \end{aligned} \right\} \quad (3.12)$$

右の式を(3.12) と(3.10) に代入し、 $Q$  の物体附近の値を計算する。 $O(1/d^2)$  を省略して、 $Q$  のように一定の速度を持つ。

$r \ll l$  ;

$$\begin{aligned} Q &= A \left[ \left( \log \frac{2d}{a} - b_1 \right) \hat{u}_1 - c_1 \hat{d}_1 - l (1 + s_1) \mathbf{e}_x - m s_2 \mathbf{e}_y \right] + O\left(\frac{1}{d^2}\right) \\ S_1 &= \int_0^\infty \frac{(1 - 2z - e^{-2z})^2 dz}{3e^{2z}(1 - 4ze^{-2z} - e^{-4z})} = 1.1087, \quad S_2 = \int_0^\infty \frac{(1 + 2z - e^{-2z})^2 dz}{3e^{2z}(1 + 4ze^{-2z} - e^{-4z})} = 1.8138 \end{aligned} \quad \left. \right\} (3.13)$$

上式の  $Q$  が  $Q = \hat{u}_0$  となるように、 $A, \hat{u}_1$  を決定すればよい。

このために、まず  $\hat{u}_1 = \mathbf{e}_x$  となるのは“あり”的  $\hat{u}_0, A, \overline{F}$  (物体に働く力) を決定して  $\hat{u}_{01}, A_1, \overline{F}_1$  とおく。つまづき  $\hat{u}_1 = \mathbf{e}_y$  となるのは“あり”的  $\hat{u}_0, A, \overline{F}$  を決定し、これを  $\hat{u}_{02}, A_2, \overline{F}_2$  とする。いま

$$\hat{u}_0 = \alpha \hat{u}_{01} + \beta \hat{u}_{02} \quad (3.14)$$

で  $\alpha, \beta$  を求めよとき、 $\overline{F}$  は

$$\overline{F} = \alpha \overline{F}_1 + \beta \overline{F}_2 \quad (3.15)$$

で“ $\overline{F}$  はされか”、得られた結果は (C) で示す。

### (B) 片壁効果 (第 1 図 Case II)

鏡像法を用いてとく。(3.6) で“ $\overline{F}$  はされか”%、 $P_0$  の鏡像を  $q'(u', v')$ ,  $p'$  とし、 $q''(u'', v'')$ ,  $p''$  を次式で定義する。

$$\begin{aligned} u'' &= -u' - 2(y+d) \frac{\partial v'}{\partial x} + (y+d)^2 \frac{\partial p'}{\partial x} \\ v'' &= v' - 2(y+d) \frac{\partial v'}{\partial y} + (y+d)^2 \frac{\partial p'}{\partial y} \\ p'' &= p' + 2(y+d) \frac{\partial p'}{\partial y} - 4 \frac{\partial v'}{\partial y} \end{aligned} \quad \left. \right\} (3.16)$$

ここで  $q'', p''$  は Stokes の方程式を満たす。いま

$$Q = q_0 + q'' \quad (3.17)$$

で、 $\mathbf{Q}$  を定義するとき、壁の上で  $\mathbf{Q}$  は  $O(1/d^v)$  を省略して 0 となる。また物体附近では  $O(1/d)$  を省略して、 $\mathbf{f}_w$  のよろな一定の速度をもつ。

$r \ll 1$  :

$$\mathbf{Q} = A \left[ \left( \log \frac{2d}{a} - b_1 \right) \mathbf{i}_r - c_1 \mathbf{j}_r - l(1+s_1) \mathbf{e}_x - m s_2 \mathbf{e}_y \right] + O\left(\frac{1}{d}\right)$$

$$s_1 = -\frac{1}{2}, \quad s_2 = \frac{3}{2} \quad \left. \right\} (3.18)$$

(3.18) は (3.13) と全く同じ形をしているから、両壁効果のときと同じ方法で物体に働く力を決定することができます。

### (C) 物体に働く力

物体に働く力  $\bar{\mathbf{F}}$  は (3.13) やび (3.18) を用いて決定され、Case I, Case II や共通して、 $\mathbf{f}_w$  のよろな形をもつ。いま物体の速度  $\bar{\mathbf{v}}_o$  を

$$\bar{\mathbf{v}}_o = l_1 \mathbf{e}_x + l_2 \mathbf{e}_y \quad (3.19)$$

で表わすとき、

$$\bar{\mathbf{F}} = \frac{4\pi\mu U}{k_1 k_2 - c_1^2} \left[ (l_1 k_1 + l_2 c_1) \mathbf{e}_x + (l_2 k_1 + l_1 c_1) \mathbf{e}_y \right]$$

$$k_1 = \log \frac{2d}{a} - b_1 - 1 - s_1, \quad k_2 = \log \frac{2d}{a} + b_1 + 1 - s_2 \quad \left. \right\} (3.20)$$

で表わされる。ここで  $s_1$  または  $s_2$  は

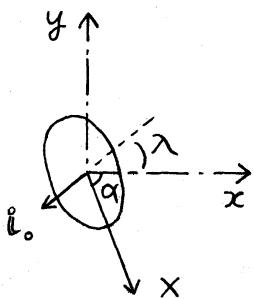
$$\begin{aligned} \text{Case I} : \quad s_1 &= 1.1087, \quad s_2 = 1.8138 \\ \text{Case II} : \quad s_1 &= -\frac{1}{2}, \quad s_2 = \frac{3}{2} \end{aligned} \quad \left. \right\} (3.21)$$

であり、また  $a, b_1, c_1$  は (2.12) で表わされる。ただしこのと

きの  $\alpha_n$  は円柱へ写像するときに用いた  $Z$ -平面の  $X$  軸と  $e_x$  方向とのなす角である。

Case I において、物体の位置が壁と壁との中間では  $\alpha_n$  は  $\pi/2$  である。物体に働く力は (3.20) と同じ形となるが、 $S_1$  と  $S_2$  の値は Case I と Case II のは  $\alpha$  の中間の値をとると考えられる。

### (例1) 橋円柱



第2図

Case I, Case II のは  $\alpha$  と、  $\theta$  う

向に速度  $U$  で運動しているとき、第  
2 図のように記号をきめるとき、  $a$ ,  
 $b_1$ ,  $c_1$  は (2.44) を用いてよ。たた

し  $\alpha$  は第2図の如く、  $X$  軸と  $x$  軸と

のなす角である。物体に働く力は (2.44), (3.20), (3.21) を用いて

$$\overline{F} = \frac{4\pi\mu U \left[ \left( \log \frac{d}{a} + A - \frac{\sigma^2}{2} \cos 2\alpha \right) \cos \lambda + \frac{\sigma^2}{2} \sin 2\alpha \sin \lambda \right] e_x + \left[ \left( \log \frac{d}{a} + B + \frac{\sigma^2}{2} \cos 2\alpha \right) \sin \lambda + \frac{\sigma^2}{2} \sin 2\alpha \cos \lambda \right] e_y}{\left( \log \frac{d}{a} \right)^2 + C \log \frac{d}{a} + D + E \cos 2\alpha - \frac{1}{4} \sigma^4} \quad \cdots (3.22)$$

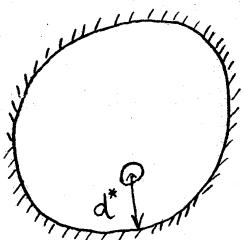
のようになります。ここで

$$\begin{array}{ccccc} A & B & C & D & E \\ \text{Case I:} & -0.6207 & -0.9156 & -1.5363 & 0.5683 \\ & & & & 0.1475 \end{array} \left. \right\} \quad (3.23)$$

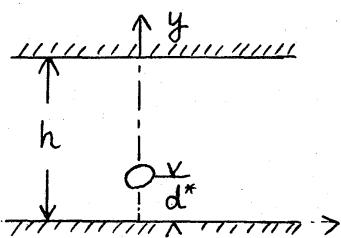
$$\text{Case II: } \log 2 - 1 \quad \log 2 \quad 2 \log 2 - 1 \quad \log 2 (\log 2 - 1) \quad -\frac{1}{2}$$

$\alpha = 0$  のとき  $\alpha$  は高石教授の結果<sup>5)</sup> と一致する。

## (ii) 2 方向の運動



第3図



第4図

第3図のように2次元的容器の中で、2方向に運動するは“あり”を考之。 $1/d \ll 1$  の条件は満たしてゐる。一般的に、外部壁の断面の円柱

への写像関数が既知であるとき、物体に働く力は  $1/d$  による展開の解と

して求めることがで“き”る。しかしこ

こでは (i) のは“あり”と同じように2枚の平行無限平板を考之、ただし物

体は任意の位置にあって2方向に運

動するとする。物体が一方の壁に  $1/d \ll 1$  の条件を満たしきが  
ら近づくときは、(i) の Case II に相当するは“あり”的解が得  
られる。

さて第4図のように  $x, y$ -軸をとり、 $z' = x + iy$  とし

$$\omega_r = \operatorname{Re} \left[ A \log \frac{\sinh \frac{\pi(z' - di)}{2h}}{\sinh \frac{\pi(z' + di)}{2h}} \right] \quad (3.24)$$

を考之るとき、 $\Delta \omega_r = 0$  あるひ壁の上では  $\omega_r = 0$  をみたす。

また  $Z (= X + iY)$ -平面上の物体 (Appendix 第A1図) の写像関数

$Z = z_0 + h(z)$  はまつて、 $z$ -平面上の半径  $a$  の内へ写像されると、 $R = \sqrt{x^2 + Y^2}$  とおいて

$$\bar{w} = w_r + A \left[ \log \frac{(3\bar{z})^{\frac{1}{2}}}{a} - \log \frac{R}{a} \right] \quad (3.25)$$

で定義される  $\bar{w}$  を速度として考えよう。このとき  $\bar{w}$  は

- (i)  $\Delta \bar{w} = 0$  とみたす, (ii)  $O(1/d)$  を省略して、壁の上で速度 0 である, (iii)  $O(1/d)$  を省略して、物体附近でつまのように一定の速度をもつ。

$$\bar{w} = A \left[ \log \frac{\pi a}{2h} - \log \left( \sin \frac{\pi d}{h} \right) \right] + O\left(\frac{1}{d}\right) \quad (3.26)$$

まづ (3.26) を用いて、物体上で  $\bar{w} = 1$  にあるよ ;  $= A$  を求め、つまに (3.25) から、物体に働く力  $F_z$  をつまのように決定することができる。

$$F_z = - \frac{2\pi \mu W}{\log \frac{2h}{\pi a} + \log \left( \sin \frac{\pi d}{h} \right) + O\left(\frac{1}{d}\right)} \quad (3.27)$$

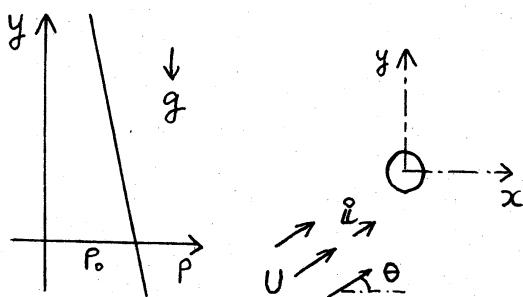
#### § 4 成層流体中の運動

鉛直下向きにいくつかの密度がましてある成層流体中に、2次元物体がやつくりと斜めの方向に、一定の速度で動かしていきはあると考える。静止流体中の密度分布は

$$\rho = \rho_0 (1 - kx) \quad (4.1)$$

で表されるとして、 $kL \ll 1$  を仮定する。

いま物体固定の座標系を考へ、かつ Boussinesq 近似をすると、この問題は定常流で取扱うことができる。こゝでつま



または無次元化量を用ひよう。

$$\bar{q}_b = \frac{\bar{q}^*}{U}, \bar{l}r^* = \frac{l r^*}{l}, \bar{P} = \frac{l P'}{U v}, \bar{P}' = \frac{P'}{P_b k l} \quad (4.2)$$

ただし  $P', P'$  は圧力、密度の一

第 5 図

様流状態における値との差を示

す。このとき非圧縮・非拡散の基礎方程式は

$$\left. \begin{aligned} \Delta \bar{\psi} - \nabla \bar{P} &= Re \bar{\psi} \cdot \nabla \bar{\psi} + Re R_i \bar{P} (\sin \theta \bar{i} + \cos \theta \bar{j}) \\ \nabla \cdot \bar{\psi} &= 0, \quad \bar{\psi} \cdot \nabla \bar{P} = (\bar{u} - 1) \sin \theta + \bar{v} \cos \theta \end{aligned} \right\} \quad (4.3)$$

で与えられる。ここで  $\theta$  は一様流が水平方向となす角、  $\bar{u}, \bar{v}$  は  $\bar{\psi}$  の  $(x, y)$  成分、  $\bar{i}$  は一様流方向の単位ベクトル、  $\bar{j}$  は  $\bar{i}$  に直交する単位ベクトルである。また  $R_i (= \log l^2 / U^2)$  は Richardson 数である。つきに境界条件式は次式で与えられる。

$$\bar{r} = f(\theta) : \quad \bar{\psi} = 0 \quad (4.4)$$

$$\bar{r} \rightarrow \infty : \quad \bar{\psi} \rightarrow \bar{i}, \quad \bar{P} \rightarrow 0, \quad \bar{P}' \rightarrow 0 \quad (4.5)$$

これから、  $Re \ll 1$  もと  $R_i \ll 1/Re$  を仮定して、この問題をきりつなき法で取扱うが、便宜的に

$$R_i = \alpha R_e^2 \quad (0 < \alpha < \infty) \quad (4.6)$$

とおく。  $R_i \gg R_e^2$  または  $R_i \ll R_e^2$  のときは、 (4.6) とおいて得られた結果に対する  $\alpha \gg 1$  または  $\alpha \ll 1$  として取扱えばよい。

## (i) きりつを用いた解

§2で定義されたごとく、内部領域を  $\bar{F} \sim O(1)$  の領域、外部領域を  $\bar{F} \sim O(1/R_e)$  の領域とし、内部変数  $\bar{R}$ 、外部変数  $R$  を (2.5) のまゝにとり、外部展開、内部展開を (2.6)、(2.7) と同一の展開をする。ただし現在のはあい (2.7) の  $\bar{P}_n$  は 0 と表してよい。またつぎのようなく  $\bar{P}$  の展開が追加される。

$$\text{外部展開: } \bar{P} = R_e^{-1} (\varepsilon P_1(R) + \varepsilon^2 P_2(R) + \cdots + \varepsilon^n P_n(R) + \cdots) \quad (4.7)$$

$$\text{内部展開: } \bar{P} = \varepsilon^{-2} (\varepsilon P_1(\bar{R}) + \varepsilon^2 P_2(\bar{R}) + \cdots + \varepsilon^n P_n(\bar{R}) + \cdots) \quad (4.8)$$

## (ii) 内部展開

内部展開 (2.7)、(4.8) を (4.3)、(4.4) に代入するとき、 $Q_n, P_n$ 、 $P_n$  に対する方程式および境界条件が得られる。 $Q_n, P_n$  に対する方程式および物体上の境界条件は (2.8)、(2.9) と同一で、Stokes の方程式を満たしている。したがって、 $Q_n, P_n$  は  $\bar{P}$  では §2 の (ii) で書かれていることが、こゝで全く同じようには成立する。また  $P_n$  は、 $Q_n, P_n$  が決定されてのう

$$Q_1 \cdot \nabla P_n = U_n \sin \theta + V_n \cos \theta - (Q_2 \cdot \nabla P_{n-1} + \cdots + Q_n \cdot \nabla P_1) \quad (4.9)$$

で決定される。しかし  $P_n$  は  $Q_{n+1}, P_{n+1}, \dots$  の決定には関係しないから、現在の展開の範囲内では  $P_1, P_2, \dots, P_n, \dots$  を計算しなくて物体に働く力は決定できる。

## (iii) 外部展開

外部展開 (2.6)、(4.7) を (4.3)、(4.5) に代入するとき

$$\left. \begin{aligned} \Delta \Psi_n - \nabla P_n - \frac{\partial \Psi_n}{\partial x} &= \Psi_1 \cdot \nabla \Psi_{n-1} + \cdots + \Psi_{n-1} \cdot \nabla \Psi_1 + \alpha P_n (\sin \theta \hat{i} + \cos \theta \hat{j}) \\ \nabla \cdot \Psi_n = 0, \quad \frac{\partial P_n}{\partial x} - u_n \sin \theta - v_n \cos \theta &= -(\Psi_1 \cdot \nabla P_{n-1} + \cdots + \Psi_{n-1} \cdot \nabla P_1) \end{aligned} \right\} \quad (4.10)$$

$$r \rightarrow \infty : \Psi_n \rightarrow 0, \quad P_n \rightarrow 0, \quad \dot{P}_n \rightarrow 0 \quad (4.11)$$

∴ "  $\Psi_0, P_0$  はこれで 0 と考へる。  $\Psi_n$  に対する  $r \rightarrow 0$  の境界条件は §2 の (iii) と同じように (2.17) ~ (2.19) の成立。

境界条件 (4.11), (2.19) のとき (4.10) をとくためには、

§2, (iii) でなされたように

$$\Psi_n = \Psi_{n1} + \Psi_{n2}, \quad P_n = P_{n1} + P_{n2} \quad (4.12)$$

と分割し、 $\Psi_{n1}$  のみたす方程式および境界条件は (2.20) ~ (2.22) と同一であるとする。したがつて  $\Psi_{n1}$  に対する結果 (2.26) ~ (2.29) はそのまま成立する。

$\Psi_{n2}$  に対する方程式および境界条件は

$$\left. \begin{aligned} \Delta \Psi_{n2} - \nabla P_{n2} - \frac{\partial \Psi_{n2}}{\partial x} &= \Psi_1 \cdot \nabla \Psi_{n-1} + \cdots + \Psi_{n-1} \cdot \nabla \Psi_1 + \alpha P_n (\sin \theta \hat{i} + \cos \theta \hat{j}) \\ \nabla \cdot \Psi_{n2} = 0, \quad \frac{\partial P_{n2}}{\partial x} - u_{n2} \sin \theta - v_{n2} \cos \theta &= u_{n1} \sin \theta + v_{n1} \cos \theta - (\Psi_1 \cdot \nabla P_{n-1} + \cdots + \Psi_{n-1} \cdot \nabla P_1) \end{aligned} \right\} \quad (4.13)$$

$$r \rightarrow \infty : \Psi_{n2} \rightarrow 0, \quad P_{n2} \rightarrow 0, \quad \dot{P}_{n2} \rightarrow 0 \quad (4.14)$$

$$r \rightarrow 0 : \Psi_{n2} \rightarrow a_n + o(1) \quad (4.15)$$

となる。任意の  $n$  に対し、上記の方程式をとく  $a_n$  を決定することは、むづかしいと思われるが、 $n=1$  のときは

(4.13) の非線型項は 0 となり、フーリエ変換を用いて  $\mathcal{B}_{12}$  をつきのように積分形で求めることができる。

$$\mathcal{B}_{12} = \frac{\alpha}{i\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{k_2(k_1 \cos\theta - k_2 \sin\theta) \{(k_1 k_2 - k_2^2 i) \sin\theta + (k_2 k_1 - k_1^2 i) \cos\theta\}}{k_1^2 (k_1^2 + i k_1) [k_1 k_2^2 (k_1^2 + i k_1) - i\alpha (k_1 \cos\theta - k_2 \sin\theta)^2]} e^{ik_1 k_2} dk_1 dk_2 \quad (4.16)$$

ただし  $ik = k_1 i + k_2 j$  である。したがって  $a_1$  はつきのようにになります。

$$\left. \begin{aligned} a_1 &= e_i \dot{i} + f_i \dot{j}, \\ e_i, f_i &= \frac{\alpha}{i\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dk_1 \int_{-\infty}^{\infty} dk_2 \frac{(k_2^2 \omega - k_1 k_2)(k_1 \cos\theta - k_2 \sin\theta)^2}{k_1^2 (k_1^2 + i k_1) [k_1 k_2^2 (k_1^2 + i k_1) - i\alpha (k_1 \cos\theta - k_2 \sin\theta)^2]} \end{aligned} \right\} \quad (4.17)$$

### (iii) 物体に働く力

$r \rightarrow 0$ における  $\mathcal{B}_n$  の漸近形は (2.30) がこのまま成立するから、物体に働く力は (2.40) よりも (2.41) である。つまり  $a_1$  が右端までいけるのであるから、 $N \approx 1$

$$\left. \begin{aligned} N &= \varepsilon [[\{1 + \varepsilon(b_1 - d)\}e_i + c_i \varepsilon f_i] \dot{i} + [\bar{c}_i \varepsilon e_i + \{1 - \varepsilon(b_1 + d)\}f_i] \dot{j}], \\ \text{または} \\ N &= \varepsilon (e_i \dot{i} + f_i \dot{j}) \end{aligned} \right\} \quad (4.18)$$

とこれ以上。またこの式は  $O(\varepsilon^2)$  が正確であることを考慮して、つきの式と同等であることが分かる。

$$\left. \begin{aligned} \bar{F} &= 4\pi \mu_0 \bar{\varepsilon} [\dot{i} + (c_i + f_i) \bar{\varepsilon} \dot{j} + O(\bar{\varepsilon}^2)] \\ \bar{\varepsilon} &= \frac{1}{-\log \alpha R_e + \log k - r - b_1 - c_i} \end{aligned} \right\} \quad (4.19)$$

$\alpha < 1$  のときには

$$e_1 \sim \frac{1}{3} (\log \alpha + 2 \log 2 - \cos 2\theta) + O(\alpha^{-\frac{1}{3}}), \quad f_1 \sim \frac{1}{3} \sin 2\theta + O(\alpha^{-\frac{1}{3}}) \quad (4.20)$$

となるから、(4.19) の  $\bar{\varepsilon}$  は

$$\bar{\varepsilon} = \frac{1}{-\log \alpha (R_i R_e)^{\frac{1}{3}} + \frac{4}{3} \log 2 - \gamma - b_1 + \frac{1}{3} \cos 2\theta} \quad (4.21)$$

を用ひればよい。(4.17) で示された  $e_1(\theta, \alpha)$ ,  $f_1(\theta, \alpha)$  は数値的に計算され、第7図、第8図に示されている。<sup>†</sup> これらの結果はつきのようなことを示している。抵抗は  $\alpha$  の増加とともにます。また運動方向が水平から鉛直方向に変化するにつれて、増加のしかたが著しくなる。ほんの水平運動では  $\alpha$  が小さいときには、抵抗を減少させる効果がある。また揚力を  $\alpha$  の増加とともに一定の値へと増加していく。運動方向が水平または鉛直のときは揚力に変化はない。 $\theta = 45^\circ$  附近で揚力を出す効果は最大である。 $\alpha$  が小さいときには揚力を減少させる効果がある。

#### (iv) 対称な物体の回転

非成層流体中を進むときには回転しており、対称形を持つ物体では、成層流体中の運動では回転する。物体がどのよくな回転数で回転するかを知るためには、まつ  $\text{rot } \bar{\varepsilon}$  の

<sup>†</sup>  $e_1, f_1$  の数値計算は後で示される  $g_1$  とともに、金子幸臣氏の advise のまことに西島勝一氏によつてなされた。

$\bar{z}$ -成分  $\bar{z}$  が、外部解の  $r \rightarrow 0$  で、 $\theta$  のようなら下るまります  
そこで調べる必要がある。 $\text{rot } \bar{q}_1$  の  $r \rightarrow 0$  での性質を調べ、  
 $r \rightarrow 0 : \quad \bar{z} \rightarrow [g_1(\theta, \alpha) + o(1)] \varepsilon R_e + \dots \quad (4.22)$

の形をもつことが分る。このときの内部解は、 $\bar{z} = \text{一定}$  が解となる。  
これは内部領域が物体と一所に存在して角速度  $\frac{1}{2} g_1 \varepsilon R_e$  で  
回転していることを表わしている。 $(4.16)$  を用いて  $g_1$  の値を  
決定すれば、物体の角速度  $\Omega^*$  は

$$\Omega^* = \frac{1}{2} g_1 R_e \varepsilon \frac{U}{\ell},$$

$$g_1 = -\frac{\alpha}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dk_1 \int_{-\infty}^{\infty} dk_2 \left. \frac{k_2 (\bar{k}_1 \cos \theta - \bar{k}_2 \sin \theta)^2}{(k_1^2 + ik_1) [\bar{k}_1 \bar{k}_2^2 (k_1^2 + ik_1) - i\alpha (\bar{k}_1 \cos \theta - \bar{k}_2 \sin \theta)^2]} \right\} \quad (4.23)$$

で与えられる。 $\alpha < 0$  に  $\alpha > 0$  のときは

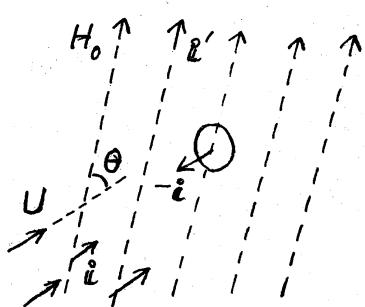
$$g_1(\alpha, \theta) = A(\theta) \alpha^{\frac{1}{3}} + \frac{1}{3} \sin 2\theta + o(\alpha^{-\frac{1}{3}})$$

の形をもつ。すなはち  $g_1(\alpha, \theta)$ ,  $A(\theta)$  の値は第9図に示されてい  
る。この結果によれば、物体は  $\theta$  方向に偏して正の方向に回  
転する。またこの大体の傾向は揚力効果のときとほぼ同一で  
ある。ただ  $\alpha$  が小さいときに、負の方向の回転はないと思  
われる。

最初につきのことを注意しあそだ。上記の回転の角速  
度は  $O(R_e)$  であるから、今まで物体固定の境界条件でと  
ってきた(iii)までの結果は、回転しているばかりでそのままで  
成立する。

## § 5. 電磁流体中の運動

一様な磁場がある、電気伝導性流体中の物体が磁場に斜め



の方向に、一定の速度で運動すればあるとき考えよう。いま物体を固定した座標系とり、かつべきのよき無次元量を用いよ。

第6図

$$\frac{\bar{q}_b^*}{U} = \bar{q}_b, \quad \frac{\bar{H}^*}{H_0} = \bar{H}, \quad \bar{p} = \frac{\ell \bar{p}^*}{UV}, \quad \frac{\bar{t}^*}{\ell} = \bar{t} \quad (5.1)$$

ただし  $\bar{H}^*$  は磁場の強度を示す。このとき定常、非圧縮の基礎方程式は

$$\left. \begin{aligned} \Delta \bar{q}_b - \nabla \bar{p} &= R_e \bar{q}_b \cdot \nabla \bar{q}_b - \frac{M^2}{R_m} (\nabla \times \bar{H}) \times \bar{H} \\ \Delta \bar{H} &= R_m [(\bar{q}_b \cdot \nabla) \bar{H} - (\bar{H} \cdot \nabla) \bar{q}_b] \\ \nabla \cdot \bar{q}_b &= 0, \quad \nabla \cdot \bar{H} = 0 \end{aligned} \right\} \quad (5.2)$$

となり、また境界条件は

$$\bar{r} \rightarrow \infty : \quad \bar{q}_b \rightarrow \bar{i}, \quad \bar{H} \rightarrow \bar{i}', \quad \bar{p} \rightarrow \bar{p}_\infty, \quad (5.3)$$

$$\bar{r} = f(t) : \quad \bar{q}_b = 0, \quad \bar{B}_{no} = \bar{B}_{ni}, \quad \bar{H}_{to} = H_{ti} \quad (5.4)$$

である。ここで物体上の磁場の条件は、磁束密度の法線成分および磁場の強度の接線成分の連続を表わしている。また

$R_m (= Ul\mu_m\sigma)$  は磁気レイノルズ数、 $M (= \mu_m H_0 l (\sigma/\mu)^{1/2})$  は Hartmann 数で、 $\mu_m$  は透磁率、 $\sigma$  は電気伝導率である。

以下において、 $R_e \ll 1$ ,  $R_m \ll 1$ ,  $M \ll 1$  を仮定して、この

問題をきりつをき法で取扱うが、便宜的に

$$R_m = \alpha R_e, \quad M^2 = \beta R_e^2 \quad (0 < \alpha, \beta < \infty) \quad (5.5)$$

とおいて取扱うこととする。 $M > R_e$  または  $R_m > R_e$  のときには得られた結果に対して  $\beta \gg 1$  または  $\alpha \gg 1$  を適用すればよい。

### (i) キリツをき法による解

§2, §4 で与えたごとく、内部領域を  $\bar{r} \sim O(1)$  の領域、外部領域を  $\bar{r} \sim O(1/R_e)$  の領域とし、内部変数  $R$ 、外部変数  $r$  を (2.5) のようにとり、外部展開、内部展開も (2.6), (2.7) と同一の展開をする。ただしつきのように  $H$  の展開が追加される。

$$\text{外部展開: } \bar{H} = \bar{a}' + \varepsilon H_1(r) + \varepsilon^2 H_2(r) + \cdots + \varepsilon^n H_n(r) + \cdots \quad (5.6)$$

$$\text{内部展開: } H = a' + R_e (\varepsilon H_1(R) + \varepsilon^2 H_2(R) + \cdots + \varepsilon^n H_n(R) + \cdots) \quad (5.7)$$

$$a' = l_1 \hat{e}_r + l_2 \hat{e}_\theta \quad (l_1 = \cos \theta, \quad l_2 = \sin \theta) \quad (5.8)$$

であり、また物体の電気伝導率は流体のそれと同程度またはそれ以下である。

### (ii) 内部展開

内部展開については §4 のときと同じように、 $Q_n, P_n$  に対する式は §2, (ii) で書かれておりこれが全く同じように成立する。 $Q_n, P_n$  がきまれば、磁場  $H_n$  はつきの式に従う。

$$\Delta H_n = -\alpha (\hat{a}' \cdot \nabla) Q_n \quad (5.9)$$

$H_n$  を決定するためには、(5.9) および物体内部の磁場  $H_{ni}$

に対する式（物体が絶縁体なら  $\Delta H_{ni} = 0$ ）を境界条件 (5.3) および matching によって得まる  $R \rightarrow \infty$  の条件のときに、いかなければならぬ。しかし §4 の  $P_n$  のとものように、現在考慮されるのは精度の範囲内で物体に働く力を決定するには、これをとく必要はなし。ただ外部解  $h_n$  の  $r \rightarrow 0$  の境界条件をきめるために、(5.9) を用いて  $R \rightarrow \infty$  の  $H_n$  の性質を調べる必要はある。

### (ii) 外部展開

外部展開 (2.6), (5.7) を (5.2), (5.3) に代入するととき、 $q_n, p_n, h_n$  に対する式が得られる。これらの式ととくたのに §2, §4 のばあいと同じように

$$q_n = q_{n_1} + q_{n_2}, \quad p_n = p_{n_1} + p_{n_2} \quad (5.10)$$

と分割し、 $q_{n_1}, p_{n_1}$  のみたす方程式および境界条件は、(2.20) ~ (2.22) と同一であると考へる。したがつて  $q_{n_1}$  に対する結果は今度も (2.26) ~ (2.29) がそのまま成立する。

さて  $q_{n_2}, p_{n_2}, h_n$  に対する方程式および境界条件は

$$\begin{aligned} \Delta q_{n_2} - \nabla p'_{n_2} - \frac{\partial q_{n_2}}{\partial x} + \frac{\beta}{\alpha} (\vec{n}' \cdot \nabla) h_n &= \frac{\beta}{\alpha} [(\nabla \times h_{n-1}) \times h_1 + \cdots + (\nabla \times h_i) \times h_{n-1}] \\ \Delta h_n - \alpha \frac{\partial h_n}{\partial x} + \alpha (\vec{n} \cdot \nabla) q_{n_2} &= -\alpha (\vec{n} \cdot \nabla) q_{n_1} + \alpha [(q_{n-1} \cdot \nabla) h_{n-1} + \cdots + (q_{n-i} \cdot \nabla) h_1] \\ &\quad - \left\{ (h_i \cdot \nabla) q_{n-1} + \cdots + (h_{n-i} \cdot \nabla) q_1 \right\} \end{aligned} \quad \left. \right\} (5.11)$$

$$\nabla \cdot q_{n_2} = 0, \quad \nabla \cdot h_n = 0$$

$$r \rightarrow \infty : \quad q_{n_2} \rightarrow 0, \quad p'_{n_2} \rightarrow 0, \quad h_{n_2} \rightarrow 0 \quad (5.12)$$

$$\left. \begin{aligned} r \rightarrow 0 : \quad \theta_{n_2} &\rightarrow \alpha_n + o(1), \\ h_n &\rightarrow \frac{\alpha A_n}{4} \left[ \{3(\bar{i} \cdot \bar{n}) \bar{u}_n - x_n \bar{u}' - (\bar{i} \cdot \bar{i}) \bar{n}\} \log r - (\bar{i} \cdot \bar{n}) x_n \frac{\bar{n}}{r^2} \right] \end{aligned} \right\} \quad (5.13)$$

とする。この  $P'_{n_2} = P_{n_2} + \frac{\beta}{\alpha} (\bar{i} \cdot h_n)$  を用いた。また  $r \rightarrow 0$  の  $h_n$  の境界条件は、(5.10) を用い  $R \rightarrow \infty$  の  $H_n$  の解を用いて計算し、これとの matching の結果得られたものである。

さて  $n=1$  のときには、(5.11) の非線型項が 0 となり、 Fourier 变換を用いて  $\theta_{12}$  をつきのようなく形に求めることができる。

$$\theta_{12} = - \frac{\beta}{\pi} \iint_{-\infty \sim \infty} \frac{(\bar{k}_1 \cos \theta + \bar{k}_2 \sin \theta)^2 (\bar{k}_1 \bar{k}_2 - \bar{k}^2 \bar{u}) e^{i(\bar{k}_1 \bar{n})}}{\bar{k}^2 (\bar{k}^2 + i\bar{k}_1) [(\bar{k}^2 + i\bar{k}_1)(\bar{k}^2 + i\bar{k}_2) + \beta (\bar{k}_1 \cos \theta + \bar{k}_2 \sin \theta)^2]} d\bar{k}_1 d\bar{k}_2 \quad (5.14)$$

$$したがって \alpha_i = e_i \bar{i} + f_i \bar{j} \quad i=3, 2, \quad (5.14) \text{ が } \checkmark$$

$$\left. \begin{aligned} e_i \text{ or } f_i &= -\frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} d\varphi (-\sin^2 \varphi \text{ or } \sin \varphi \cos \varphi) \left[ \left(1 + \frac{1-\alpha}{F}\right) \log \frac{1+\alpha+F}{2} + \left(1 - \frac{1-\alpha}{F}\right) \log \frac{1-F-1-\alpha}{2} \right], \\ F &= \sqrt{(1-\alpha)^2 + 4\beta (\cos \theta + \sin \theta \tan \varphi)^2} \end{aligned} \right\} \quad (5.15)$$

が得られる。さらには (5.15) を積分して、 $\theta$  の解が得られる。

$$e_i = J_m P + \frac{1}{2} \Re ( \log Q + R ), \quad f_i = \Im ( \log P )$$

$$P = \left\{ \left( \frac{\alpha^2-1}{G^2} + 1 \right) / Q + 2R/G^2 \right\} \beta \sin \theta e^{i\theta}, \quad Q = \alpha - \beta e^{2i\theta} \quad (5.16)$$

$$R = \frac{\alpha-1}{G} \log \left( \frac{\alpha+1-G}{\alpha+1+G} \right), \quad G = \sqrt{(\alpha-1)^2 + 4\beta e^{2i\theta}} \quad (\Re G > 0)$$

† (5.15) および (5.16) の導出は、金子幸臣氏による。

## (iii) 物体に働く力

§4 のはあいと同じように物体に働く力は (2.40) および  
 (2.41) である、また  $N$  としては (4.18) をとればよい。さらに  
 (4.19) もそのまま成立する。ときに  $\beta \gg 1$ ,  $\alpha = 1$ ,  $\theta = 0^\circ$  のときには、(5.16), (4.19) よりつきの結果が得られる。

(a)  $\beta \gg 1$  のとき

$$e_1 \sim \log \sqrt{\beta} + \sin^2 \theta, \quad f_1 \sim -\frac{1}{2} \sin 2\theta, \quad \bar{\varepsilon} = \frac{1}{-\log \alpha M - \gamma + \log 4 - b_1 - \sin^2 \theta} \quad (5.17)$$

(b)  $\alpha = 1$  のとき

$$e_1 = \frac{1}{4} \log (1 - 2\beta \cos 2\theta + \beta^2) + \frac{\beta(1+\beta) \sin^2 \theta}{1 - 2\beta \cos 2\theta + \beta^2}, \quad f_1 = \frac{1}{2} \frac{\beta(1-\beta) \sin 2\theta}{1 - 2\beta \cos 2\theta + \beta^2} \quad (5.18)$$

c)  $\theta = 0^\circ$  (平行磁場) のとき

$$e_1 = \frac{1}{2} \left\{ \log |\beta - \alpha| + \frac{(1 - \sqrt{(1-\alpha)^2 + 4\beta})}{\sqrt{(1-\alpha)^2 + 4\beta}} \log \left| \frac{\sqrt{(1-\alpha)^2 + 4\beta} + 1 + \alpha}{\sqrt{(1-\alpha)^2 + 4\beta} - 1 - \alpha} \right| \right\}, \quad f_1 = 0 \quad (5.19)$$

物体が円柱のときには、(2.40), (4.18), (4.19), (5.17), (5.18) から得られる結果は、Oseen の式を基礎として得られた橋本教授の結果<sup>6)</sup>と、また (2.40), (4.18), (4.19), (5.19) から得られる結果はやはり Oseen の式を基礎として得られた吉信教授の結果<sup>7)</sup>とそれぞれ一致する。

$\beta, \alpha$  が任意のとき、物体に働く力の定性的性質は、 $\alpha = 1$  のときと比較してあまり変わらないから、ここでは省略する。

### § 6. 結論

(i) § 2, § 4, § 5 のは"あり、いつれも外部解に現われる定数 ( $a_1$  or  $a_2$ ) をさめるために 2 重積分を必要とした。その order について 1 つだけ精度を上げるために、2 重積分の代りに 4 重積分を処理しなければならぬ。さらに  $\epsilon$  によって精度を上げてやくたのには、多重度がだんだん増加する多重積分を処理してゆかねばならぬから、その奥に困難が伴うと考えられる。

(ii) 成層流体、電磁流体中の運動で、浮力や電磁気力が抵抗、揚力、回転などに及ぼす効果は、大体において物理的に予想される通りである。しかしあるによつては、物理的な予想だけでは判断がつかないで、計算によつてはじめて、力の定性的な性質がはつきりするは"あるもある。例えは"成層流体で  $R_i$  が小さいときに、浮力の抵抗や揚力に及ぼす影響が逆転することなど、このよ"り例であると思われる。

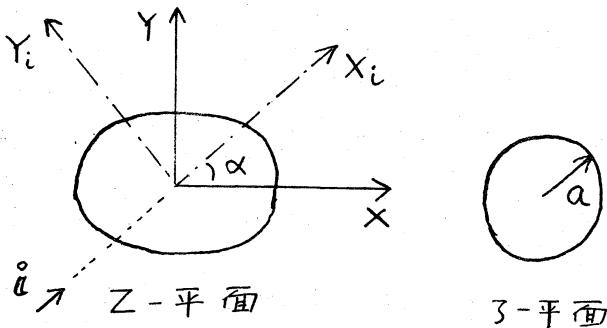
### Appendix

$a_n, b_n, c_n$  の決定法：

$Z = X + iY$  とし、第 A1 図のまゝに  $Z$ -平面上の物体が

$$Z = \zeta + \zeta_0 + h(\zeta) \quad (A1)$$

によつて、 $\zeta$ -平面上の半径  $a$  の円に写像されるとする。こ



第A1図

$\tau$  は定数で、 $h(z)$

は  $|z| \gg 1$  で  $h(z) \sim o(1)$

とする。

いま Stokes の方程式

を満足する複素速度

$W$  を  $W = U - iV$  で定義すると、乙の正則な任意関数  $f(z), g(z)$

を用いて、 $W$  はつぎのように表わすことができる。<sup>3)</sup>

$$\begin{aligned} W &= f'(z) + \bar{z}g'(z) - \bar{g}(\bar{z}) \\ &= F'(z) + (\bar{z} + \bar{z}_0 + \bar{h}(\bar{z})) \frac{G'(z)}{1+h'(z)} - \bar{G}(\bar{z}) \end{aligned} \quad \left. \right\} (A2)$$

ここで

$$\begin{aligned} G(z) &= -A e^{iz} \log z \\ F'(z) &= A e^{-iz} \left[ \log \frac{z}{a^2} + \frac{a^2 e^{2iz}}{z^2} + \frac{\bar{z}_0 e^{2iz}}{z(1+h'(z))} + e^{2iz} H(z) \right] \end{aligned} \quad \left. \right\} (A3)$$

である。ただし  $H(z)$  は  $|z| > R$  で正則な関数とする。このとき

$$W = A e^{-iz} \left[ \log \frac{z}{a^2} + e^{2iz} \left\{ \frac{a^2}{z^2} - \frac{\bar{z}_0}{z} - \frac{\bar{h}(\bar{z}) - \bar{z}h(z)}{z(1+h'(z))} + H(z) \right\} \right] \quad (A4)$$

となる。いま物体境界上  $z = a e^{i\theta}$  で  $W = 0$  とするから  $H(z)$

を求める。このためには次式が成立たねばならない。

$$H(ae^{i\theta}) = \frac{\bar{h}(ae^{-i\theta}) - ae^{-i\theta} h'(ae^{i\theta})}{ae^{i\theta}(1+h'(ae^{i\theta}))} \quad (A5)$$

$H(z)$  は内向外で正則であるから

$$H(z) = \sum_{n=0}^{\infty} C_n z^{-n} \quad (A6)$$

のようには展開でよい。すなはち  $A_n$  は (A5) を用いて

$$C_n = \frac{\alpha^{n-1}}{2\pi} \int_0^{2\pi} e^{(n-1)i\theta} \frac{\bar{h}(ae^{-i\theta}) - ae^{-i\theta} h'(ae^{i\theta})}{1 + h'(ae^{i\theta})} d\theta \quad (A7)$$

のようには決定できる。

$$|Z| \gg 1 \text{ のとき } Z = Z + O(1) \text{ であるから, } Z = Re^{i\theta} \text{ とおいて, (A4),}$$

(A6) から、

$R \gg 1$ :

$$W = A e^{-i\alpha} \left[ \log \frac{R^2}{\alpha^2} - e^{-2i(\theta-\alpha)} + C_0 e^{2i\alpha} + O\left(\frac{1}{R}\right) \right] \quad (A8)$$

が得られる。すなはち

$$C_0 = \frac{1}{2\pi\alpha} \int_0^{2\pi} \frac{\bar{h}(ae^{-i\theta}) - ae^{-i\theta} h'(ae^{i\theta})}{e^{i\theta}(1 + h'(ae^{i\theta}))} d\theta = r e^{i\beta} \quad (A9)$$

とおき、第 A1 図 のようには単位ベクトル  $\hat{i}_n$  および座標軸  $X_i$  を定めると

$$\begin{aligned} R \gg 1 : \quad \mathbf{q} &= 2A \left[ \left( \log \frac{R}{\alpha} \right) \hat{i} - \frac{X_i R}{R^2} + \frac{1}{2} \{ 1 + r \cos(\beta + 2\alpha) \} \hat{i} \right. \\ &\quad \left. - \frac{r}{2} \sin(\beta + 2\alpha) \hat{j} \right] + O\left(\frac{1}{R}\right) \end{aligned} \quad (A10)$$

$i \neq A, i$  は任意であるが、 $-2A = A_n, i = \hat{i}_n, X_i = X_n$ ,

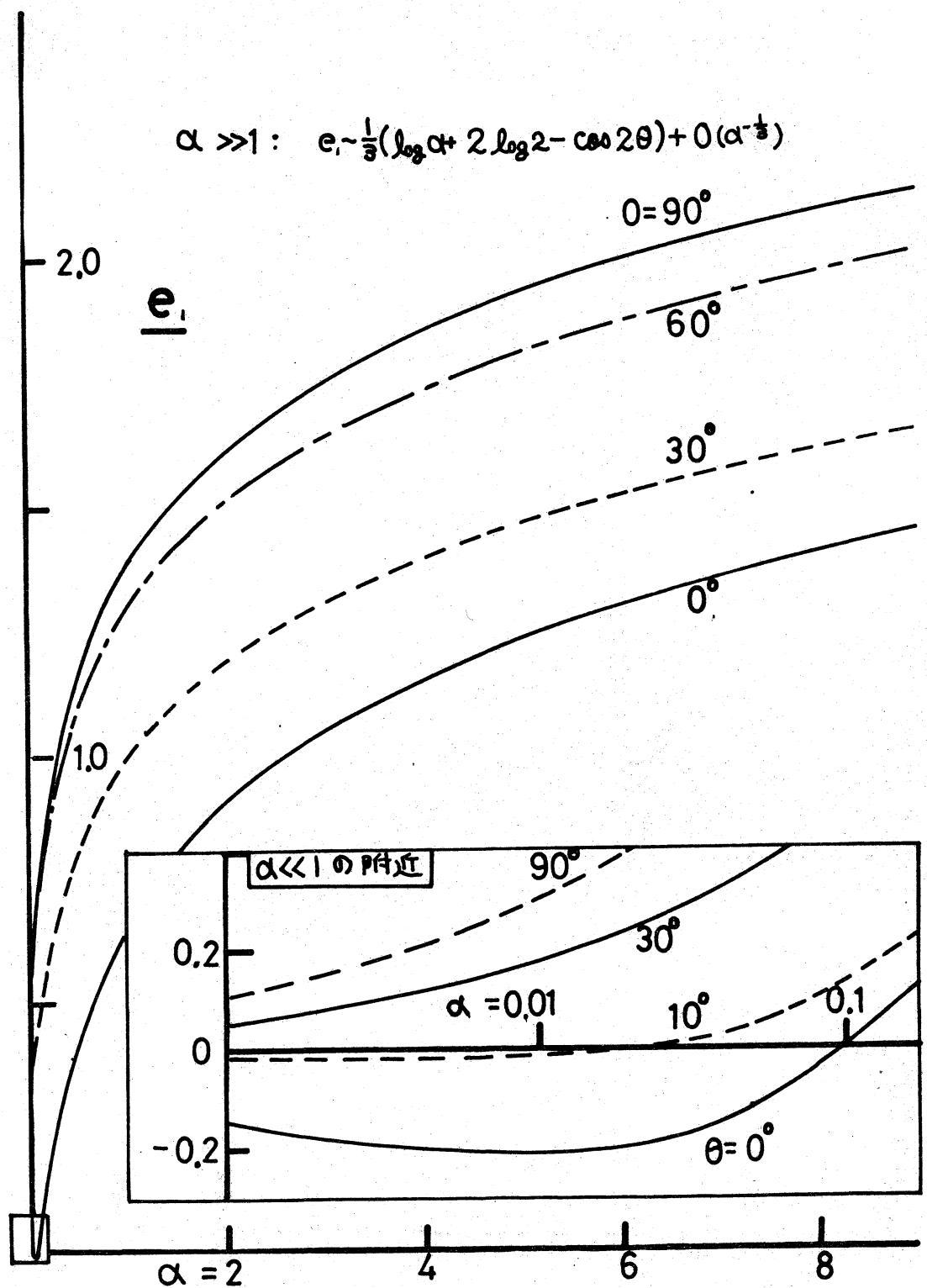
$\alpha = \alpha_n$  とかければ、(A10) は

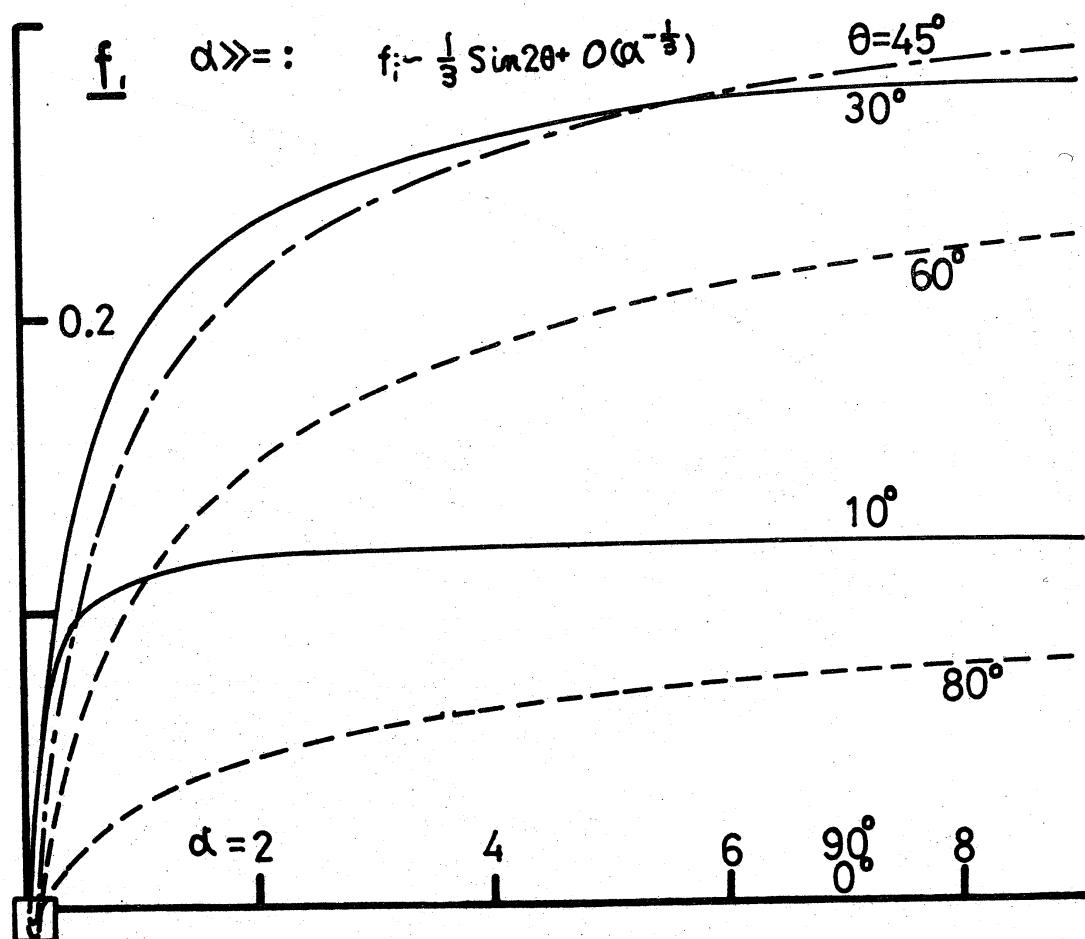
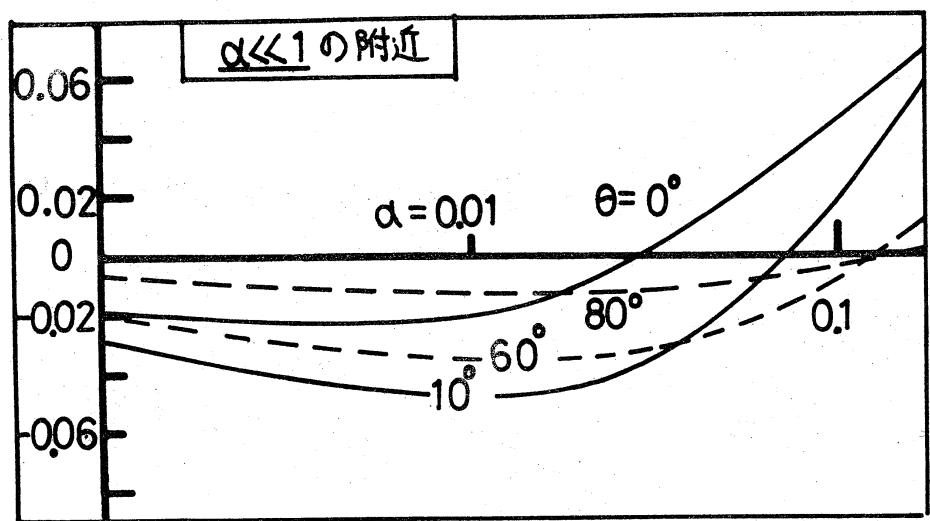
$$\begin{aligned} R \gg 1 : \quad \mathbf{q} &= A_n \left[ \left\{ -\log \frac{R}{\alpha} - \frac{1}{2} - \frac{r}{2} \cos(\beta + 2\alpha_n) \right\} \hat{i}_n + \frac{X_n R}{R^2} \right. \\ &\quad \left. + \frac{r}{2} \sin(\beta + 2\alpha_n) \hat{j}_n \right] + O\left(\frac{1}{R}\right) \end{aligned} \quad (A11)$$

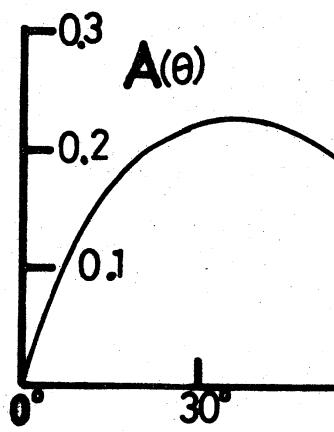
の形となる。(A11) と (2.10) との比較は图示、(2.12) の図

## 文 南大

1. S. Kaplan : Fluid Mechanics and Singular Perturbations  
(Academic Press , New York , 1967 ) P52.
2. T. Proudman & J.R.A. Pearson : J. Fluid Mech. 2  
(1957) , 237 .
3. I. Imai : The Second International JSME Symposium  
(Sept. 1972) , Fluid Machinery and Fluidics , 2. 15.
4. Y. Takaishi : J. Phys. Soc. Jap. 10 (1956) , 1092 .
5. Y. Takaishi : J. Phys. Soc. Jap. 13 (1958) , 496 .
6. H. Hasimoto : Rev. mod. Phys. 32 (1960) , 860 .
7. H. Yosinobu : J. Phys. Soc. Jap. 15 (1960) , 175 .







$$\alpha \gg 1 : \\ g \sim A(\theta) \alpha^{\frac{1}{3}} + \frac{1}{3} \sin 2\theta + O(\alpha^{-\frac{1}{3}})$$

